

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方」2013 度第 3 回研究会（通算第 7 回）

日時：2013 年 9 月 28 日（土） 13:00～19:00

場所:AA 研マルチメディアセミナー室(306)

檜垣立哉（AA 研共同研究員、大阪大学）

「アレゴリー論 ベンヤミンとバロック論を中心にして」

河野憲二（AA 研共同研究員、京都大学）

「感覚情報を行動と知覚へ変換する脳の働き」

「アレゴリー論 ベンヤミンとバロック論を中心にして」

檜垣立哉（大阪大学）

今回の発表では、ベンヤミンのアレゴリー論を中心に議論をおこない、アレゴリーという言葉的な現象と、神話や科学（とりわけ生物学など）を構成するさまざまな事態を架橋することを試みた。

ヴァルター・ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』などで、バロックアレゴリーにかんするさまざまな議論を展開しているが、それはたんなる文学論の領域にとどまるものではなく、同書の冒頭に置かれた「認識批判的序章」にみられるように、きわめて形而上学的、神学的、哲学的な内容をそなえたものである。本発表では、ベンヤミンが「象徴」からアレゴリーを厳然と区別し、その独自の役割を、〈理念〉や〈理性〉という事態と連関させていること、そして、ベンヤミン自身の後期の歴史哲学やそこで展開されている時間論と深く関連するものであること、などについてまずは検討した。ついでその過程のなかで、たとえばジル・ドゥルーズが展開している生命論的な思考と、ベンヤミンのバロック的思考との共鳴をとりだし、一面では言語論について深い洞察を示しているベンヤミンと、他方では生命哲学的な領域での業績をのこしているドゥルーズをクロスさせることを試みた。

こうして提示されるアレゴリーは、まさにベンヤミンが「断片」と語るような現象のあり方

を、アレゴリー自身が強調する「音としての物質性」「文字としての物質性」の観点から明らかにしてくれるものでもある。だがそれは、ベンヤミン解釈という枠内にとどまるのではなく、個別的な現象が普遍的な「意味」から規定されるのではなく、むしろそうした現象性をもって、物質的な音や字の形態によって、「理念」を「星座」としてとらえかえすことを示すものでもある。それは「個物」の特殊性を消し去ることなく、「理念」の普遍を肯定する言語の根本的なあり方としてみいださせるものでもあるのである。それゆえアレゴリー論は構造や理念という議論に依拠するさまざまな現代的な諸学問のあり方に通底する発想としても展開可能であるとおもわれた。

こうした観点から、アレゴリー論は、まさに生物学レベルでの個物と種との関係、あるいはレヴィ＝ストロースが『神話論理』で述べているような神話と構造の知との連関へとさまざまに拡張可能なものと考えられる。今回の発表ではその端緒を述べるにとどまったが、本研究会の趣旨にあうかたちで、今後より深く考察をすすめていきたい。

「感覚情報を行動と知覚へ変換する脳の働き」

河野憲二（京都大学）

ヒトやサルなど視覚の発達した霊長類の脳皮質には、視覚に関連した領野がたくさんあることが知られている。1980年ごろから高次視覚系の研究が急速に進み、第一次視覚野から先の視覚情報処理の経路には動きや空間内の位置の視覚に関連した背側経路と、ものの形や色の視覚に関連した腹側経路があり、それぞれの領野に至っていることが示されている。それぞれの経路や領野での視覚情報処理と、腹側経路の最終領野である下部側頭葉と、背側経路の最終領野である頭頂葉が関わる視覚情報処理について実際の実験例などを示しながら概観する。

外界の様々な物体によって反射され眼に入ってくる光は、そのエネルギーが網膜で光受容細胞（錐体、杆体）によって電気信号に変換され、双極細胞から神経節細胞に伝えられる。この時、光受容細胞の数が有限であることから、外界に無限にある情報は、毎秒10,000,000,000ビット程度に減少してしまう。さらに神経節細胞でインパルスの頻度に変換された情報が網膜から脳に入るとき、インパルスが通過する視神経の本数により毎秒6,000,000ビット程度に減少する。この情報の量は第一次視覚野ではさらに減少し、毎秒10,000ビット程度となり、意識に上る高次視覚野での情報量は毎秒100ビット程度まで圧縮されていると考えられている(Raichle, 2010)。私たちは外界に無限にある物体、現象を観察し、理解することが可能であるという漠然とした印象を持っているが、これは明らかに誤解であり、外界から生きていくのに必要な、極めて限られた対象を選択し、見て知覚することで、必要な行動を選択し、実行していると考えられる。

他人の顔を知覚することは、個人を区別し認識する、喜怒哀楽などの感情の表出を知るなど、社会生活を送るうえで重要な機能で、腹側経路の最終領野であるヒトの場合は紡錘状回、サルの場合は下部側頭葉に、ヒトやサルの顔に選択的に反応するニューロンが存在することが知られている。Yamane ら(1988)は、30人のヒトの顔を記憶させたサル下部側頭葉から顔に反応するニューロンを記録し、個人の顔の弁別がニューロンレベルでどのように行われているか調べた。サル下部側頭葉から記録された顔に反応するニューロンは、いくつかの顔に反応するが反応の大きさは異なること、一つの顔に反応するニューロンがあるわけではないことが明らかになった。また、その反応の違いは眉、眼、髪など顔の要素間の距離の組み合わせに依存していることも明らかとなった。この結果は、顔の認識のために脳内に grandmother cell (おばあさん細胞)と呼ばれるニューロンがあり、一人一人の顔を別々のニューロンがコードしているという旧来の仮説とは相容れないものである。しかしながら、最近の Quiroga のグループの研究(2005)は、ヒトの海馬から記録されたニューロンが、個人の顔に反応することを示していて、視覚情報が記憶に深く関係する海馬のレベルまで到達すると、熟知しているコンセプトに極めて選択的に反応するニューロン活動が現れるのではないかと考えられる。